

あーとスペースぐるぐる（北海道帯広市）について

2019.6.27 丸山正雄

「あーとスペースぐるぐる」に行ってきました。予てより新しい地域活動拠点を見に来てほしいとお招きを頂いていたからです。それ以上に、重度の障害をもつ人の芸術及び創作活動の実態を見てみたいと思ったからです。大阪から帯広は直行便がないため、伊丹から東京を経由して帯広に行きました。当日は大阪での G20 開催のため、空港は厳戒態勢下になり、チェックインするまでいつもの数倍時間がかかりました。2 階の出発フロアは封鎖状態で、モノレールの駅まで行列が続きました。帰りの 29 日は、米国のトランプ大統領が急遽韓国を訪問することとなり、私が搭乗した東京からの便は名古屋上空を 90 分も旋回するという悲惨な待機状況となりました。その後、トランプ大統領は韓国・北朝鮮国境付近で金正恩氏と会い、遂に国境を越えて北朝鮮の土を踏むという歴史的瞬間をテレビで視聴することとなりました。

さて、「あーとスペースぐるぐる」ですが、社会福祉法人帯広協会が運営する就労継続支援 B 型事業所「あいとう」と居宅介護事業所「カント」が 2 階部分を、1 階部分は「あーとスペースぐるぐる」と利用者さんの作品常設展示場「白樺通り美術館」が入っていました。建物全体を「popke ポッケ」と名付け、その意味はアイヌ語で“あたたかい”という意味だそうです。元々美容院として使用していたのを 5000 万ほどで購入したとのこと。3000 万円かけてリノベーションし、駐車スペース（車両 20 台駐車可）も十分でした。

社会福祉法人帯広協会について述べます。前身は大正 14 年 7 月に近藤兼一氏が設立した北海道吃音矯正施設（札幌市）。100 年近い歴史を持つとともに、沿革を見る限り数多の苦難を乗り越えてきたことが窺い知れます。

（沿革）

昭和 2 年 3 月	私立札幌盲啞学校として道庁の認可を得る
昭和 6 年 1 2 月	私立札幌聾啞学校として文部大臣の認可を得る
〃	私立札幌盲学校として文部大臣の認可を得る
昭和 1 2 年 9 月	ヘレンケラー女史の来道を期して札幌において特種学校と福祉の研究会で職業指導施設整備
昭和 1 8 年 1 1 月	十勝御影村石山に糠路湖畔の回復者のアフターケアと聾啞者の楽土を目的とし、北海道聾啞農志塾を設立
昭和 2 0 年 7 月	札幌空襲必至となり、2 2 2 名の聾啞・盲生を十勝御影村平和の北海道聾啞農志塾及び他の施設に集団疎開
昭和 2 2 年 9 月	第 2 回ヘレンケラー女史来道の際は、札幌三越における作品展示会、演劇、接待等の一切を北海道聾啞農志塾の聾啞者が行い、その作品を贈呈
昭和 2 2 年 9 月	十勝御影山麓を襲った台風で収容施設 1 2 0 坪、教育施設 8 0 坪その他全壊

昭和26年1月	財団法人北海道聾唖農志塾として道知事の設立認可を得る
昭和27年5月	社会福祉法人御影学園として組織変更し、厚生省の認可を得る 同時に、児童福祉施設家庭園を聾唖児施設御影学園と名称変更する (後につつじヶ丘学園と名称変更)
昭和29年11月	聾唖児施設御影学園火災により全焼
昭和38年4月	昭和32年に新築の聾唖児施設御影学園2度目の火災全焼
昭和54年6月	精神薄弱者施設いずみ寮の認可(厚生省)を受ける(後に愛灯学園と名称変更)
平成元年4月	社会福祉法人御影学園から帯広福祉協会に法人名を変更
平成9年2月	グループホーム開始 (以後、順次計10か所40名のグループホームを整備)
平成30年6月	popke(ポッケ)開所

歴史はともかく、同一施設で北海道には稀有な台風被害と2度の全焼火災は筆舌に尽くしがたい出来事であったと思います。また、かの有名なヘレンケラー女史と深い縁があったことに驚きました。特に、女史2度目の来道の折りには、聾唖の利用者が仕切っての対応は相当な準備を費やしたであろうし、僅か数日後に施設が全焼するという惨い仕打ちがあるとは誰が想像しえたでしょうか。



2013年12月、遂に新しい園舎が完成しました!

つつじヶ丘学園



スノーズレンルーム



popke での創作活動風景

つつじヶ丘学園では、乗馬療育にも力を注いでいます。2頭の道産子を活用しての乗馬療育は、十勝地方の看板であり、インストラクターには浦河わらしべ園で乗馬インストラクターをしていた安住祐弥（日本乗馬療育インストラクター養成学校卒業）さんもここで働いています。馬場の横には私にとっても忘れられない・・・いわく付きのトイレがあります。というのも、平成14年頃私は浦河わらしべ園に単身赴任していました。一方、大阪のわらしべ会では枚方市の意向を受けて、王仁公園の一角に知的障害者授産施設を開所することになりました。当時、乗馬療育は法人本部があるわらしべ園にありましたが、その機能を新しい施設に全て移すというものでした。乗馬療育を移転するにあたって新しい厩舎、高低差のある2面の馬場や柵づくりが急務となり、トイレも必要となったのです。トイレ以外の見積もりは既に4000万円を超え、最終的にはこのトイレは予算オーバーでお蔵入りとなりました。支援員のIさんから連絡を受け、急を要すから旭川にある製造販売会社まで行って見積もりを取ってほしいというものでした。片道4時間かけ、250キロの道のりを運転しました。日帰りでしたので、正味1時間の仕事（30分はバイオトイレのビデオ鑑賞）で往復8時間の運転という世にも過酷な記憶しかありません。よくよく考えると、大阪から直行便だと2時間で行ける旭川ですが、同じ北海道とはいえ、浦河から車で4時間を要すことを考えると、なんだか腑に落ちませんでした。村井先生が言っているから・・・といわれれば、自ずと優先順位は決まります。個人的には、水を必要としないバイオトイレ（微生物で有機物を分解し、土壌改良剤として畑に活用できる優れたエコ活動）には興味がありましたので、ご参照ください。



※この度のバイオトイレ導入に際し、正和電気株式会社様には多大なご配慮を戴きました。

障害児支援施設つつじヶ丘学園と障害者支援施設愛灯学園は並んで同一敷地内にあります。前面には、広い中庭があり、よく手入れされた芝生が目にも眩い景色で和ませます。利用者の生活するところ、活動するところ全てに渡ってよく清掃されていました。台風や火災によって幾度も建て替えを余儀なくされることとなった経験が、管理面での清潔保持に繋がっているのでしょうか。嫌な臭いも一切なく、気持ちの良い空間づくりがいかに大切かということを学んだ気がします。勿論、整理整頓もきちんとされていました。

愛灯学園施設長の阿部さんとは浦河わらしべ園で知己を得ました。重なった期間は半年ほどでしたが、その後20年近くお付き合いしています。彼が施設長となって以降、この法人は倍以上の規模となり、乗馬療育や芸術活動の拠点づくりなど積極的な活動を展開しているようです。popke内にある就労継続支援B型事業所「あいとう」(20名)は、①不用品回収業、②清掃業、③草刈り、④カラス除けごみサークル製作販売、⑤印刷業務(のぼり旗各種、横断幕・懸垂幕各種)、と活動そのものに独自性があります。先住民(アイヌ)の文化や言葉も大事にしていこうとする姿勢に好感が持てます。

道内の障害福祉施設10団体で発足した「北海道アール・ブリュット(注)ネットワーク協議会」は、芸術活動に実績のある障害福祉事業所、全道規模の障害者福祉協会、さらに権利擁護を考える弁護士、芸術専門家や大学教員も加わり、幅広い視点から主に障害者の芸術活動支援を行う目的で2015年3月に設立されました。

「ゆうゆう」(当別)と「かたるべの森」(当麻)の2事務局4圏域(道央・道北・道南・道東)体制で広域な北海道を網羅。全道の北海道障がい者芸術活動の情報収集・調査を行うと共に、展覧会などで発信。担い手の育成などにも取り組み、全道に協力者を求め裾野を広げながら、アール・ブリュットで北海道全体が輝くことを目的とし、帯広福祉協会の「あーとスペースぐるぐる」の果たす役割は、今後益々大きくなると思います。また、枚方でも社会福祉施設地域貢献連絡会を通じて働きかけ、芸術を通して障害をもつ人たちの感動を伝えていける環境を作っていかなければならないと感じました。

(注:ブリタニカ百科事典参照)

生の芸術の意。第二次大戦後、J. デュビュッフェは幼児、精神病患者、囚人あるいは完全な素人などの人々が純粋に自己の楽しみで制作した作品を収集し、アール・ブリュット(仏)と呼んだ。1947年パリのドリーアン画廊の地下室で初公開。1948年には、A. ブルトン、M. タピエ、J. ポーランらが原生芸術協会を設立。5000点を超すコレクションはパリのガリマール社、ニューヨーク、パリ、ローザンヌと移動を繰り返した。無意識的な生の初原を示し、西欧的な論理を一切考慮しない芸術として評価された。

以上